

地域安全保障特集：中国軍の仮想敵国の順序

漢和防務評論 20171004(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

漢和防務評論に中国軍の仮想敵の順序と題する記事がありましたので紹介します。
順序は、台湾、米国、日本、インド、北朝鮮です。
最近、中国軍は、台湾を仮想敵から直接の敵に昇格させたようです。
中国は、このいずれの国とも紛争の種を抱えています。同時に2つの状況が発生するのを極度に恐れています。2正面、3正面作戦になると勝利はむづかしいと考えているからです。
中国は”連鎖反応条件下”の作戦としています。

台湾、米国、日本、インドが中国の4大仮想敵国であったが、2016年に北朝鮮が加わった。

KDR 東京平可夫特電：

本誌は2016年、北朝鮮人民軍が正式に中国軍の仮想敵になったとのニュースを報道した。昨年、中国軍内部で仮想敵問題を論ずる論文が明らかに増加している。

中国軍は現在自国の仮想敵国をどのように考えているか以下説明する。

中国軍は次のように考えている：2000年以降、中国周辺の安全保障環境は：

”東緊”、”西暴”、”南乱”、”北穩”の状態であった。

具体的に述べると、5つの方面の潜在的脅威とは：

第1の潜在的脅威は：米国の”アジア・リバランス戦略”である。”リバランス”の意味は明白である。すなわち”中国をさらに抑制すること”であり、様々な作戦を繰り出し、陰謀を巡らしている、と。

ここでは”潜在的脅威”だけを指摘していることに注目すべきである。したがって米国は、中国にとって第1の”脅威の源泉”である。

このことから、中国の第2の仮想敵は依然として米国であることが分かる。従来台湾が第1の仮想敵であった。現在中国軍の多くの内部文献を見ると、もはや台湾を仮想敵とする説はなく、対台湾作戦の基本原則、戦法について、従来から特別の章に記述されている。したがって台湾は”潜在的脅威”ではなく、”直接の脅威”である。

注目すべきことに、北朝鮮人民軍が中国軍の第3の仮想敵になったことがある。

中国は、北朝鮮の核兵器、弾道ミサイル開発問題に関してどの程度関心を持っているのだろうか。最近の内部文献では、”朝鮮核問題”とか”朝鮮”とか論文中に直接国名を名指しするようになった。

中国軍は次のように考えている：第2の潜在的脅威は複雑に錯綜する朝鮮の核問題である。近年、朝鮮は核兵器の開発に注力し、”核保有国家”であることを

正式に宣言した。多くの核兵器基地を中国との国境付近に配置しているが、その意図は、朝鮮は核施設をもって中国という国家を拉致しようとしている。したがって戦争が勃発したならば、中国は巻き添えを食う可能性が極めて高く、中国東北部、華北、或いは華東が重大な脅威を受ける。

日本は、インドより上の第 4 の仮想敵国である。中国は：中日の釣魚島衝突を第 3 の潜在的脅威と見ている。現在、双方の航空機および艦船が出入りしているが、日本当局は国際社会と国民の反対を顧みず、いわゆる XX 防衛大綱を通過させ、軍備拡張の野心を示している、と。

第 4 の潜在的脅威は、明らかに南海島嶼の争いである。現在、中国は南海の支配に関して楽観視してはいない。南海の 53 個の島嶼中、台湾が支配する太平洋島を含め、大陸はわずかな島嶼しか支配していない。210 万平方 KM のうち、数十万平方 KM しか支配しておらず、形勢は極めて不利で腹背に敵の脅威を感じている、と。

第 5 の潜在的脅威は：中国領土を虎視眈々と狙っているインド（名指ししている）である。このことからインドは、中国の第 4 の仮想敵国であり、そして第 5 の潜在的脅威の源泉である。中国は次のように考えている：長年インドは軍事力建設を推進してきた。その直接の目標は中国である。最近 2 年間、インドの武器購入経費は連続して”世界一”を維持している。大国間のバランス維持のため、米国とロシアは、”インドを以て中国を制御”しようとしている。特に最近は、中印国境の西中段地区で、双方で結んだ協定をインドは公然と無視し、インドに近く中国から遠い前沿哨所を利用し、第 1 線兵力をインドを多く、中国を少なくし、道路条件をインドに有利に、中国に不利にする等、局地優勢を図り、機を見ては係争地区の偵察浸透を強化し、強硬姿勢を見せ、兵力量と作戦計画を周到にし、氣勢をもって圧力を加えてきている、と。

中国軍は、中印領土紛争の歴史的淵源を明らかにし、終始高度の警戒態勢を維持している。

中印国境の歴史問題について、中国は次のように考えている：1950 年、中国はチベットでの主権行使を回復した。しかしインドは迅速な領土拡張の指導思想のもとに辺境地区で頻繁に問題を起こし、国境線を捻じ曲げ、中国の国境付近の領土を勝手に併合し、当面の中印国境紛争に多くの問題を発生させている、と。

中印国境紛争の歴史と実態

中国側は次のように見ている：中印国境は、従来から歴史的にも正式に画定されたものではない。しかし、双方の行政管轄の歴史を見ると、逐次一本の伝統的、習慣的なラインが形成されてきた。この伝統的、習慣的なラインを遵守することによって中印両国は 2000 年以上の歴史の間に戦争を起こすことはなかった。19 世紀末になって、英国植民者は、インドを統治し引き続き中国南西部と中国西部の国境地帯に侵入、当時の中国中央政府に背いて不法な”マクマホンライン”をでっちあげた。1961 年 10 月 20 日、インドは 10 個旅団以上の兵力を派遣し中印国境の東西両段で大規模武力侵攻を開始した。中国軍国境警備

部隊は甚大な被害を被り、これ以上耐えられない状況下でやむなく自衛反撃作戦を行い、失った領土主権を奪回した。戦後、中国軍は、1959年11月7日現在の双方の実際の支配ライン後方20kmの地区まで自主的に撤収した。東段においては、不法な”マクマホンライン”以北まで撤収しさらに20km後退した。これを以て相互不可侵の協定を結んだ。しかしインド軍は、それを無視し、中国軍の後退を待って中国の国境領土を蚕食し自国領を主張した。これが中国国境紛争問題として以後残ることになった。これが中印国境紛争の歴史と実態である、と。

ここで説明を加えると、：1961年の衝突に関して、中国とインドの主張には大きな隔りがあることだ。1979年の中越戦争と同様に、双方の主張の違いは極めて大きい。

中印双方の国境問題の現状

近年来、中印国境は暫時棚上げになっている。双方が経済発展に注力し、両国の高層階級の相互訪問の増加に伴って、経済領域での協力関係が深まり、軍事領域でも一部協調の動きがあった。そのことが両国の緊張関係をある程度緩和させた。しかし、インドの総合国力が逐次強化されるにしたがって、領土拡張の野心は少しずつ増長し始めており、それが中印国境戦争の危機を孕ませている。中印国境戦争は一触即発の状態にあり、軽視したり危機感を麻痺させることは極めて危険である、とKDRは考える。

”中印国境戦争は一触即発である”との評価は、正しい評価なのか？KDR主幹平可夫は、何度もニューデリーを訪問しインドの戦略学者と意見交換を行った。インドは作戦の意図はなかった。

中国軍の戦略学者は、文献中の最後に次のように述べている：インドの経済力が如何に高まろうとも、中国との差は大きい。

2014年、中国のGDPは60.9兆円を超え、世界第2の経済大国となり、対外貿易額は世界第1位、外貨準備高は世界第1位、外資導入も世界第1位となった。インドは、個別の科学技術領域では目覚ましいものがあるが、総合科学研究領域では中国よりもはるかに遅れている。インドは、一部の科学技術領域では大きな発展を遂げているが、中国は科学技術領域でインドよりも先行している。中国の科学技術研究費は世界第三位で、米国、日本に次いでいる。しかしドイツやフランスのような欧州の大国よりも上にある。

インドの軍事力は一部強化されているが、総合作戦能力は中国に劣る。近年来、インドの軍事予算は増え続けている。2014年は34300億ルピー（1312億ドルに相当）で、驚くべき数字である。インドが購入した武器のリストから見ると、インドは中国の潜在的脅威に対抗するために、主にミサイル攻撃と陸上での衝突を想定し、海上と空中を従としている。しかし中国は、武器装備の開発を促進し部隊への装備を鋭意速め、部隊の作戦能力を高めている。しかも中国は、自ら必殺兵器を保有し、ますます多くの戦勝の手段と方法を手に入れている、と。

戦闘環境について

中国軍の学者は、次のように述べた：戦闘精神弱化の問題を上手く解決し、将来戦争における連鎖反応を防止し対インド作戦に勝利する、との堅固な戦闘精神を打ち立てねばならない、と。

インド軍に対して中国軍は全体的に見た態勢は優勢であるが、国境に配備された武器装備と兵力は、中国に比べインド軍が優勢である。これらのことから、インド軍との戦闘は、必ず陣地戦になる。両軍の対峙は、武器装備等の物質的要素の対抗ではなく、軍人の意志、頑強さ、自己犠牲等、戦闘精神の対抗となる、と。

また中国軍は次のように考えている：対インド軍作戦準備において、中国は優勢といえども、絶対ではない。このため、連鎖反応条件下の対インド作戦準備に万全を期すためには、対インド作戦中に遭遇する可能性のある難問題を掘り下げて研究しなければならない。特に作戦任務と作戦環境の特性に着目し戦勝の戦法を研究しなければならない、と。

いわゆる”連鎖反応”とは、ここで説明する必要がある。対インド作戦、対台湾作戦の中国軍各種文献を見ると、中国軍は、2つの戦場で同時に状況が発生するのを特に恐れている。すなわちインドが台湾情勢悪化を利用し、進攻を開始する。或いは台湾が中印戦争を利用して、独立を宣言する等、である。またさらに（他方面の）連鎖反応が発生することである。

以上